二〇一四年度大学入試センター試験　解説〈現代文〉

第1問　評論　齋藤希史『漢文脈と近代日本』

［概　要］

昨年の読みにくかった小林秀雄の随筆から、例年通り評論に戻った。文章量は一割程度減少したが、題材が中国の士大夫階級と日本の士族階級とを比較しながら、近世日本における漢文と士人意識のあり方を論じている点で、受験生のなじみの薄い文章であった。

設問別では、**問1**の漢字は例年よりやや難しく、**問2**から**問5**までの傍線部問題は本文の正確な読みとともに設問の要求を的確に押さえることが求められ、やや難といえる。**問6**は、内容そのものではなく、段落ごとの表現や構成を問う問題であり、例年とはやや異なる趣の問題であった。

［解　説］

問1　漢字問題　標準

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、それぞれ選べ。

昨年に続いて受験生の漢字力の有無が問われるレベルの漢字が並んだ。日本語は同音異義語が多いので、正確に文脈を踏まえ、置かれている漢字の意味を把握してほしい。解答に当たっては選択肢を「消去法」で落として正解にたどりつくことも可能だが、できれば自力で書ける力をつけておきたい。いずれにせよ、日頃から漢字に関して多角的な勉強を積み重ねておくことが望ましい。

(ア)　棒読み　①窮乏　◎②痛棒　③膨張　④無謀　⑤存亡

(イ)　占める　①浅薄　②旋風　◎③占拠　④宣告　⑤潜在

(ウ)　軍功　①拘泥　②首肯　③巧拙　◎④功罪　⑤生硬

(エ)　容易　①経緯　◎②簡易　③遺産　④偉大　⑤委細

(オ)　契機　①鶏口　②啓発　◎③契約　④恩恵　⑤警鐘

正解　(ア) 1　(イ) 2　(ウ) 3　(エ) 4　(オ) 5

②　③　④　②　③

問2　標準

傍線部A「もう少し広く考えてみましょう。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを選べ。

今回の文章には、評論には珍しく「リード文（前書き）」があり、それも含めて傍線部Aに至るまでの流れをつかむことが大切。

日本の江戸幕府において、「漢文を読み書きする行為が士族階級を主な担い手として日本全国に広まったことを述べた後に続く文章である」とリード文に書かれていることをまず押さえる。

その後、十九世紀以降の日本において「漢文が公的に認知された素養であった」ということが書かれ、第3段落と第4段落で「士族階級」が「自身の知的世界を形成して」いく過程の中で、「ある特定の思考や感覚の型が形成されていった」と書かれている箇所を押さえることが大切。図式化すると、

十九世紀以降の日本において、漢文が公的に認知された素養であった

←

漢学によって士族階級が自身の知的世界を形成していく

←

その過程で、**士族階級に、ある特定の思考や感覚の型が形成**されていった

←

傍線部A「もう少し広く考えてみましょう。」

こうしてみるとわかるように、傍線部A「もう少し広く考えてみましょう。」というのは、「**士族階級**」が「**ある特定の思考や感覚の型が形成されていった**」**ということに関して「もう少し広く考えてみましょうと筆者が言っている**ことがわかる。

そこで筆者は、第6段落以降では日本から中国へと視野を広げ、中国古典文が「士大夫」という特定の階層の人々によって担われてきた歴史について考察している。そして、第9段落で、「古典詩文の能力を問う科挙」は「士大夫の思考や感覚の型」を継承し保証するシステムであることが書かれ

る。

つまり、**日本における「士族階級」と中国における「士大夫階級」とは、同じような過程を経て「特定の思考や感覚の型」を形成していったという**ことを筆者は述べている。これを説明している選択肢は④で、これが正解。

選択肢はすべて「中国に目を転じて時代をさかのぼり」で始まっているので、それ以下の箇所を見ていくと、①は、「中国古典文に見られる思想と文学の共通点を考慮に入れる」が本文に記述がなく×。また、「日本において～根拠」も×。②は、「科挙を例に～議論を展開」「漢学が素養として公的に認知された理由」のいずれも×。③は、後半の「漢文学習により～」以下が×。「知的世界が多様化」したという記述は本文にはない。⑤は、「中国古典文に示された民情への視線を分析」が本文に記述がなく、また、後半の「漢学の専門家以外にも漢文学習が広まった背景」というのも、筆者の考察対象としては間違っている。

正解　6　④

問3　応用

傍線部B「人がことばを得、ことばが人を得て、その世界は拡大します」とあるが、中国では具体的にどのような展開があったのか。その説明として最も適当なものを選べ。

第6段落から始まる「中国古典文」についての考察は、**問2**でも見たように、日本における士族階級への漢文の普及のあり方と類似したところがあるはずだ、という点で、**問2と問3とは連動した問題**といえる。その点で、この二つの問題を同時に失点しないよう、正確に読み切ってほしい。

傍線部Bの「人がことばを得、ことばが人を得て、その世界は拡大します」というのは、直後の文にも書かれているように、中国において士人もしくは士大夫と呼ばれる階級の人が、高度なリテラシー（読み書き能力）を持つことで書きことばの世界を支え、それを拡大していくことを意味している。

第7段落の『論語』や道家の話、第8段落の『詩経』もその具体例であり、士人もしくは士大夫たちが中国古典文、特に書きことばの世界を支える主役であることが論証されている。

第9段落の冒頭の幅広い指示語「こういう」でまとめられたもの以下を読むと、「古典詩文の能力を問う科挙は、士大夫を制度的に再生産するシステムであったのみならず、士大夫の思考や感覚の型―とりあえずこれをエトスと呼ぶことにします――の継承をも保証するシステムだった」と書かれている。

以上の点から整理すると、

1. **傍線部Bの「人」とは、「士人もしくは士大夫」。**
2. **傍線部Bの「ことば」とは、「中国古典文」の「書きことば」。**
3. **傍線部Bの「世界の拡大」というのは、「科挙」による、「士大夫を制度的に再生産するシステム」および、「士大夫の思考や感覚の型の継承を保証するシステム」**

こんな風にまとめられる。

以上を踏まえると、正解は②とわかるが、選択肢中の「統治システム」という言葉が少し引っかかる。本文では、第8段落に「士人」である以上「統治のために民情を知る」とあり、「科挙制度」が「統治システム」だとつかめれば特に問題ないのでOKだ。

他の選択肢を消去しておこう。

まず、傍線部Bの「人」は「士人もしくは士大夫」を指しているので、その主語を間違えている選択肢①は×。次に、④は「科挙制度のもとで確立した身分秩序が流動化していった」と、本文の説明とは逆の内容になっているので×。先ほど整理した3.で見たように、「科挙」は「士大夫を制度的に再生産するシステム」なので、「流動化」ではなく、「固定化」の方向でなければならない。同様に、⑤の「書きことばの規範が大衆化」「システム全体の変容」というのも、本文と逆の説明になっているので×。

残る選択肢では、③の「儒家の教えが社会規範として流布し」とあるのが間違い。第7段落では、「無為自然を説く道家にしても」とあるように、士大夫は道家思想からも「士としての生き方」を学んだのであって、「儒家の教えが社会規範として流布し」たわけではないので×。

正解　7　②

問4　応用

傍線部C「刀は、武勇でなく忠義の象徴となる」とあるが、それによって近世後期の武士はどういうことが可能になったのか。その説明として最も適当なものを選べ。

「どういうことが可能になったのか。」とあるところから、傍線部以下に展開していく内容を正確に読み切っていく。

常識的には「武」と「文」とは対立するものだが、太平の世では「刀は武勇」ではなく、「刀は忠義の象徴」であるというのが、傍線部。これによって何が可能になったのかということだが、傍線部以下を読むと、

「近世後期の武士」にとっての「武」と「文」

1. 行政能力が文、忠義の心が武。「武」に支えられて「文」がある。（第14～15段落）
2. 武芸の鍛錬も技術ではなく精神修養が中心。（第15～16段落）
3. 寛政以降の教化政策によって、学問は士族が身を立てるための必須の要件となる。（第17段落）

これをまとめてみよう。

近世後期の武士にとって「武芸」は「忠義」という精神的なものであり、その精神こそが行政能力である「文」を支えるものになった。学問は統治を維持する官僚である士族が、身を立てるための必須条件となった。この説明になっているのは④。なお、傍線部の「刀」というのは文脈上、武芸の「象徴」、あるいは「典型」といえるものなので、「武芸の典型」としている選択肢④は特に問題ない。

①は、「理想とする中国の士大夫階級の単なる模倣ではない～」以下の説明が本文になく、内容的にも間違いで×。

②は、「単なる武芸の道具であった刀を、漢文学習によって得られた吏僚としての資格」と見なしたという説明が×。戦時、武芸を象徴する刀は、平時においては忠義の象徴になったのであって、「吏僚の資格」になったわけではない。

③は、「武芸を支える胆力と、漢文学習によって獲得した知力」という説明が本文になく、「武士の新たな価値を発見」できるようになったとも本文に書かれていないので×。

⑤は、「常に刀を携えることで」という表現がまず×。「絶対・必ず・常に」等の全肯定、あるいは全否定の語が選択肢にある場合は、本文に書かれているかどうかを必ず確認してほしい。書かれていない場合は、もちろん×だ。次に、「統治のためには～」以下の説明も本文に書かれていないので×。特に「出世のための学問を重んじる風潮に流されず、精神の修養に専念できる」という説明は本文には全く書かれていない。

正解　8　④

問5　標準

傍線部**D**「漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負ってしまうことでもあった」とあるが、それはどういうことか。本文全体の内容に照らして最も適当なものを選べ。

設問の要求は「本文全体の内容に照らして」とあるが、傍線部**D**につながる流れとしては、第17段落以降に書かれる「教化政策」の影響を押さえる必要があるので、まずそれをまとめてみよう。

「教化政策」によって武士の子弟たちに何が起きたかというと、

1. 学問は士族が身を立てるために必須の要件となった。

2. 「修身」から始まる儒学を学ぶことは、治国・平天下に連なり、つまり統治への意識を持つことになった。

そして、「本文全体の内容に照らして」という問いに従うと、**問2**を解く過程で見たように、漢学によって士族階級が自身の知的世界を形成していく過程で、

3. 士族階級に、ある特定の思考や感覚の型が形成されていった。

この三つが、武士の子弟たちが漢文を学ぶことを通して得たことだ。傍線部の「道理」というのは、**1.**の「学問」や**2.**の「『修身』から始まる儒学」のことを指し、「天下」というのは「統治への意識」のことを指していることがわかる。

つまり、武士の子弟たちが漢文を学ぶことを通して**「学問という身を立てるために必須の要件を得て、ある特定の思考や感覚の型を身に付け、統治への意識を持つことになった」**とまとめることができるので、正解は③とわかる。

他の選択肢を見ておこう。

①は、「技能を会得」「エリートとしての内面性」が×。特にそうした記述は本文になされていない。

②は、「行政能力としての文～調和させる」はいいとしても、後半の「幕吏として登用されるために不可欠な資格を獲得するようになった」が×。本文に書かれているように、日本での「学問吟味」は中国の「科挙」とは明らかに異なっていて、「ままごと」のようなものであり、せいぜい履歴として記せる程度のものだ。「不可欠な資格」というのは無理がある。

④は、「士人としての生き方を超えた～」以下の内容が本文を完全に逸脱しているので×。

⑤は、「中国の士人が～感化される」ということはあるかもしれないが、「それに基づき国家を統治するという役割を天命として引き受ける気になった」という説明は間違い。傍線部**D**における「天下」というのは、「天下国家」の「天下」であり、「天下を背負う」というのは「統治への意識」を持つことなので、「役割を天命として引き受ける気」のことではない。

正解　9　③

問6　(i)　**応用**　(ii)　**応用**

この**問6**は、年によってやや傾向が変化する問題で、一昨年は「論の展開に関する説明問題」ひとつであったが、昨年は「文章の表現」を問う問題で(i)と(ii)の二つに分かれていた。今年度は昨年同様、形式的には(i)と(ii)の二つに分かれているものの、内容的には「表現」と「構成」について問われている点で異なっている。来年以降、どういう形式や内容になるかは不明だが、受験生としてはどんな設問にも対応できる実力をつけておいてほしい。

(i)　この文章の表現に関する説明として最も適当なものを選べ。

問6の「**内容合致**」や「**構成・表現**」**に対する解法としては、基本的に「消去法」で解くのが正しい**。選択肢を客観的に把握するために、要素に分け、それを本文の内容、構成や表現と照らし合わせながら、正確に○×の判断をしていく。判断に迷う場合は△にして通過しておき、二度目に最終決断を下すよう、慎重に解いていこう。

①は、「読み手に問いかけるような」とあるが、第9段落の一文は特に読み手に「問いかけ」ていないので×。

②は、引用された表現で「前の部分と、それに続く部分との関係があらかじめ示され」ているという説明は正しいが、それによって「内容が読み取りやすくなっている」とまで言えるかどうかは、はっきり言ってわからない。○も×も付けないで、この選択肢は△レベルとして通過しよう。

③は、「～のです」という文末表現が、「そこまでの内容についての確認・念押しが行われ」ているという説明に無理がある。そもそも本文全体が「です・ます」調で書かれており、特にどの段落の文末が確認や念押しになっているという効果があるとは読めないので×。

④は、「学術的な言い回し」「観念的なスタイル」が×。「漢籍を待たずとも」や「文武両道なるものは」という表現は学術的ではない。また、本文の内容は硬質な文体ではあるが具体的説明も交えたもので、「観念的」とは言えない。

以上、全部の選択肢を消去法で見ていくと、通過していた②以外は確実に×が付いて落とせるので、正解は②と決まる。

正解　10　②

(ii)　この文章の構成に関する説明として最も適当なものを選べ。

(i)と同様に「消去法」で解いていこう。

まず、①だが、**問2**の傍線部**A**が置かれている第5段落から展開があり、第10段落までで中国古典文が士大夫によって支えられてきたこと、そして科挙制度の意味などの具体的な説明になっている。次に、第11段落から最後の第20段落までは日本に話を戻し、近世の武士たちが漢文を読み書きすることの意味が具体的に説明されている。特に×する要素が見つからないので、残したまま次の選択肢を検討する。

②は、「第3段落～第16段落が中心部分」というのが×。①で見たように、第1段落～第4段落、第5段落～第10段落、第11段落～第20段落と三つに区切るのが正しい。

③も、②と同様、段落の大きな区切り方が間違っているので×。

④も、第1段落～第2段落を「起」とするのは無理があり、第11段落と第12段落の間で切っているのも間違い。さらに、第20段落だけを起承転結の「結」であるというのは、内容的にも取れない。

正解　11　①

第2問　小説　岡本かの子「快走」

［概　要］

一九八八年十二月のセンター試行試験以来の岡本かの子の文章。昨年度に比べて分量は一〇〇〇字程度増加したが、内容は受験生にとって読みやすいものであった。戦時中という時代背景を押さえていれば、人物関係や場面などは複雑ではなく、読解は難しくない。

設問別に見ると、**問1**の語句は辞書的な意味が正解であり、基本レベル。**問2**、**問3**、**問5**の傍線部問題も、本文に根拠がはっきりしており、長い選択肢の問題もあるが、標準レベル。**問4**は傍線部のない問題であったが、本文の流れを正確につかめば難しくはない。**問6**の「四つの場面の表現に関する説明」問題は、選択肢と本文とを照らし合わせて一つ一つ正確に見ていかなければ正解できない問題であり、二つとも正解するのはやや難しい。

［解　説］

問1　語句問題　(ア)　基本　(イ)　基本　(ウ)　基本

傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、それぞれ選べ。

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろからいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。下手に文脈に戻して判断すると間違える可能性がでる問題が出題されている。

(ア)の「刻々に」は、「受験が刻々と近づく」などと使う慣用表現で、「時間がたつのにつれて」の意。選択肢では⑤「次第次第に」が正解。

(イ)の「腰を折られて」は、「話の途中で腰を折る」などと使う慣用表現で、「途中で妨げる」意なので④が正解。

(ウ)の「われ知らず」は、「われ知らず涙が出てきた」などと使う慣用表現で、①「自分では意識しないで」が正解。

正解　(ア)　12　⑤　(イ)　13　④　(ウ)　14　①

問2　基本

傍線部A「ほーっと吐息をついて縫い物を畳の上に置いた」とあるが、このときの道子の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを選べ。

最初の傍線部問題であり、心情にからむ理由説明問題なので、小説の場面や状況、人物関係などをしっかり把握してから解答するようにしたい。

●心情が問われる問題でも、まずは客観的な要素（状況や場面設定・人物関係・人物や風景描写など）を本文で押さえ、それらが矛盾している要素を含む選択肢を消去する。

傍線部Aにいたる流れをつかもう。今回の小説ではリード文（前書き）がなく、「快走」という小説の全文であることから、素直に話を最初から押さえていけばよい。道子が弟や兄の着物を縫っている場面から小説はスタートするが、（注1）を読んで時代背景をつかむことが大切だ。

「国策」の語に付いている（注1）を読むと、「国家の政策。この小説が発表された昭和一三（一九三八）年前後の日本では、国家総動員法が制定されるなど国民生活に様々な統制が加えられた」とある。つまり、道子が兄弟のために一日中着物を縫っているのは、戦時下の窮乏した生活からの必然であり、精一杯家族のために真剣に縫い物に取り組んでいる様子が「顔も上げないで、忙がしそうに」という道子の描写からもうかがわれる。

それに対して、兄は「ははははは」と笑い、「俺は和服なんか着ないよ」と言ってさっさと去っていく。その直後に傍線部Aがあることを押さえよう。

ここでの**「ほーっ」という吐息は、道子の「真剣さ」に対して、兄の対応があまりに軽いノリであることからくる一種の気落ち**とでもいうもので、いわゆる「気が抜けた」状態を指している。その説明になっているのは③。

①は、「孤独を感じている」というほど、はっきりした道子の心情が本文に示されていない。また、傍線部Aの直後に「急に屈托して来て」とあるところからも、兄の態度に対する道子の心情は、孤独感ではなく、「あーあ、自分だけ真剣に頑張っているなんて、馬鹿らしい」という方向のものだ。ちなみに「屈托」は「くよくよすること」。

②は、「使命感に酔って」というのはある程度取れなくもないが、それを指摘された道子が「恥ずかしさにいたたまれなくなっている」というのは、やはり直後の「急に屈托して来て、大きな脊伸びをした」という心情や動作につながっていかないので×。

④の、「憤りを抑えがたくなっている」も②と同様、直後の「急に屈托して来て、大きな脊伸びをした」という心情や動作につながっていかないの

で×。

⑤は、「家族のための仕事が自分には楽しいものとは思えない」とあるが、忙しそうに縫い物をしている道子が、その仕事を楽しんでいるのかそうでないのかの判断はここではつかない。またここでの「吐息」は、「投げやりな気分」というよりも、緊張が解けて落胆したときに思わず出る息のことなので×。

正解　15　③

問3　基本

傍線部B「わくわくして肌を強くこすった」とあるが、この様子からうかがえる道子の内面の動きはどのようなものか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部Aから傍線部Bまでは約2ページあるので、ある程度速度を維持しながら正確に読解してほしい。

おおよその話はこうだ。戦時下での生活は、16行目にもあるように道子に「あわただしい、始終追いつめられて、縮こまった生活ばかりして来た」という思いを抱かせている。堤防の方に向かって歩き出した道子は、誰も見る人がいないことに気がついて、下駄を脱いで駆け出すという大胆な行動に出る。女学校時代の道子はランニングの選手だったので、当時のことを思い出して「潑剌と活きている感じがする」のである。

そして道子はこれから毎日「月明の中に疾駆する」決意をするが、家の者には誰にも話さない。翌日、道子は「ちょっと銭湯に行って来ます」と嘘をついて家から出ることに成功し、堤防へと駆けて行く。青白い月光に照らし出された堤防の上を走る道子は、「**自分はいま潑剌と生きてはいるが、違った世界に生きている**」と感じ、「**人類とは離れた、淋しいがしかも厳粛な世界に生きている**」と感じる。それは道子に「**自分独特の生き方を発見した興奮**」を与えるのだった。

こうした流れを正確に読解していれば、傍線部Bで「わくわくして肌を強くこすった」という道子の心情を把握するのはそれほど難しくないだろう。選択肢を見ていこう。

①は、「自分の行為の正しさを再認識し」とあるが、そうした心情を本文から読解することはできないので×。

②は、「非常時では世間から非難されるかもしれないことに密かな喜びを感じ始め」とあるが、そうした心情描写は本文には一切書かれていないので×。

③は、前半は問題ないが、後半の「窮屈に感じていた～明るい予感」は本文に描写がなされていない。あくまで、傍線部Bの直前にあるように

「自分独特の生き方を発見した興奮」にわくわくして肌を強くこすったのである。

④は、「社会や家族の一員としての役割意識から逃れた別の世界」という説明が、本文の「人類とは離れた、淋しいがしかも厳粛な世界」「自分独特の生き方」と対応した説明になっている。また、**傍線部Bの「わくわくして」の言い換えとして「胸を躍らせ」と書いてあるのもOK**。さらに、「肌を強くこすった」のは「発見をあらためて実感しようとしている」ためであり、説明として完璧なのでこれが正解。

⑤の、「他者とかかわりを持てないことの寂しさ」「社会や家庭の中で役割を持つ自分の存在を感覚的に確かめようとしている」はいずれも、今まで説明してきた道子の心情に反していたり、書かれていなかったりするもので×。

正解　16　④

問4　基本

本文90行目までで、陸郎と道子とはお互いをどのように意識し合う関係として描かれているか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線が引かれていない問題であり、本文90行目までというかなり広い範囲を対象とした問題ではあるが、ここまで設問を解き、本文を正確に読解していればそれほど難しい問題ではない。ただし、選択肢が三行もあるので、基本的な姿勢として「消去法」で臨むほうが正解だろう。

①は、まず「いとおしく感じており」とあるが、陸郎が道子をそう思っている根拠が本文には書かれていない。また「母親に反発を覚えている」というのも言い過ぎ。道子のほうの意識の説明も、本文に根拠がないもので、「表には出さないが心の底では信頼し合っている」というのも根拠がなく×。

②は、「照れ隠しから突き放すような接し方になり」という陸郎の心情や態度の説明が本文に見つからない。道子のほうの説明も「奔放な陸郎への憧れを率直に表現できず」「年ごろの兄妹らしい恥じらいと戸惑い」というのも根拠がなく×。

③の、「陸郎はきまじめな道子を気安く冷やかしたりもする」というのは、傍線部Aの前後の描写から正しいと判断できる。母親の指示に「素直に応じる気にはならない」というのも、59～61行目のやり取りから正しい説明だ。道子のほうも、32～34行目と対応する説明で問題なし。最後の「二人は近しさゆえにかえって一定の距離を保っている」だけが検討材料だが、60行目に「陸郎は妹の後をつけるということが親し過ぎるだけに妙に照れくさかった」とあるので、この説明で正解といえるのだが、とりあえずここは置いておいて④と⑤を検討しよう。

④は、「陸郎は内心では道子が融通の利かない性格だと思っている」が×。本文にはそうした記述はない。また、最後の「かえってぎこちなくなっている」というのは、陸郎が道子に冗談を言っているシーンなど、描写されている二人のやりとりからしておかしい。

⑤は、「大人びた振る舞いを兄として信頼しており」の説明に該当する根拠が本文からは見つけられない。また、道子が「あえて自分の発見を伝えなくても兄には理解してもらえると思っている」という説明も本文に反する。道子は自分の発見を兄に伝えても、親し過ぎてからかわれると思って、あくまで独りで内密に味わいたかった（33～34行目）と書いてあるので×。

以上の「消去法」から、キープしておいた③が正解として浮かび上がってくるが（今回の内容であれば、ズバリ③が正解としてもよい）、選択肢の正確な精査が必要なので、日ごろから選択肢を要素に分け、本文と照らし合わせてスピーディーに○△×を判断するように訓練しておいてほしい。

正解　17　③

問5　基本

傍線部C「二人は真剣な顔をつき合せて言い合っていたが、急に可笑しくなって、はははははと笑い出してしまった。」と、傍線部D「二人は娘のことも忘れて、声を立てて笑い合った。」の、それぞれの笑いの説明として最も適当なものを選べ。

複数の傍線が引かれているのを絡めて解く問題。こうした問題は数年に一度出題されるが、話の流れとそれに応じた心情の変化を正確に押さえていくことで正解できる。あわてないで一つずつ丁寧に読解していくことだ。

まず傍線部Cでは、娘の道子が秘密でランニングをしていることを知って心配する両親だったが、父親は途中から道子の行動に理解を示し、逆に興味から「**道子の様子を見に行く**」と言ったところ、それまで心配のあまり道子を呼び寄せて叱ろうとしていた母親までも「**私も一緒に行きますわ**」と言ったという流れをつかむ。その母親の豹変ぶりに、父親が「**お前もか**」と言った直後の笑いが傍線部C。

●傍線部の直前に会話がある場合、その会話の内容が原因となり、次の言動（傍線部）を生むという因果関係になっているかどうかを確認する。

今回はまさにこのパターン。最初は二人とも道子のことを心配し、場合によっては叱ろうとまでしていた母親だったが、父親のほうが先に道子の行動に理解を示し始め、ついには母親までもが道子の走る姿に興味を持って一緒に見に行きたいと言ってしまう。その変化に気がついて二人して笑い出したもの。こうした流れをつかめれば、傍線部Cの説明部分だけで正解は①に絞られる。

傍線部Cの説明として、②は「たかだかランニング程度にあまりに深刻になっていたと気がつき」、③は「余計な取り越し苦労をしたことに気がつ

き苦笑し合っている」、④は「保護者としての互いの思い入れの強さに苦笑し合っている」、⑤は「本音では～建て前を互いに言い募っていた」がそれぞれ間違い。ただし、これだけで絞り切れない人、あるいは確認のためにも傍線部**D**の方も見ておこう。

傍線部**D**に至る流れとしては、道子を追って堤防まで来た父と母だったが、遅れて駈けて来る妻に対して夫が文句を言いながらも、「俺達は案外まだ若いんだね」と言って二人で高笑いする。二人して月光の下を走ったのは最近ではないことで、娘のことも忘れて声を立てて笑い合ったというもの。

ポイントは、二人して夜道を走ったことで、娘を監督する親としての立場を忘れて久しぶりに充実感を味わっているという点。その説明として正しいものも①しかなく、これが正解。②は「日頃から世間の批判ばかり気にして」「自分たちの勇気のなさ」、③は「娘を心配した互いの必死さにあきれ」、④は「はじめて娘の気持ちが理解できたことを喜び」、⑤は「家で～明るい未来を予感し」がそれぞれ間違い。

正解　18　①

問6　基本・基本

この文章の四つの場面の表現に関する説明として適当なものを二つ選べ。

小説の最後の問題はこうした「表現の特徴」や「叙述の説明」について問うものが連続して出題されている。昨年同様、今年も正解を「二つ」選ぶ形式になっている。

解法としては、選択肢を要素に分けて○×を付け、基本的に消去法で解くのが確実。また、選択肢同士を比較して解くという視点も有効だ。一つずつ選択肢を見ていこう。

①は、「道子の心情は」「心内のつぶやきのみで説明されている」が間違い。10行目の「屈托して来て」等、心内のつぶやきではなく、地の文でも道子の心情の説明は行われている。

②は、「道子が倒置法の返答」をしたことが「母親の不審を呼び」とあるが、そう解釈するには無理がある。母親が不審に思ったのは、毎日長湯に行くことを不審に思ったのであって、道子の返事が「倒置法」だったからではないので×。

③は、「読点の有無に違いがあり」となっていて、その違いについて説明されているが、読点のない父親のセリフの「まあ待ちなさい」の「まあ」は、「あきれた気持ち」を表しているのではなく、怒っている母親をなだめるためにソフトに話しかけたと取るべきで×。

④は、「勢いよく走り出す様子を描くのに直喩」を用いているかの確認をすると、43行目に「弾条仕掛のように飛び出した」、132行目に「弾丸のように川上へ向って疾走した」が見つかる。次に、「情景を描くのに色彩表現を用い」ているかの確認をすると、44行目に「多摩川が銀色に光って」、134

行目に「堤防の上を白い塊が飛ぶ」が見つかる。それらの表現により、「イメージ豊か」になっているという説明は問題ない。

⑤は、四つの場面とも道子の台詞は「家族からの問いへの応答から始まっている」とあるが、125行目のところで、道子から母親へ「お湯へやって下さい。頭が痛いんですから」と問いかけているシーンがあるので×。これを見落とさないようにしたい。

⑥は、場面場面の説明として的確で特に問題ない。これは一発で正解とわかる選択肢のはずだ。

以上から、④と⑥が正解になるが、⑥は一回目の検討段階で正解とわかる比較的易しい選択肢。④の方を選ぶには、他の選択肢のキズを見つけて消去していかなければならない。また、④の根拠を見つけるのも丁寧にやらなければならず、少し時間が食われる可能性が高い。

●「表現の特徴」や「叙述の説明」で二つの正解を選ぶ場合、一つはすぐに正解とわかる場合が多く、もう一つの正解はすべての選択肢を消去法で確認した後、残ったものを選ぶという手順を取る。

正解　19・20　④・⑥（順不同）